

保育心理士資格取得講座（保育心理士公開講座）

臨床心理学Ⅰ・臨床心理学Ⅱ

～こころの構造やとらえ方について～

期日 平成28年5月21日（土）

場所 岐阜福社会館

講師 岐阜聖徳学園大学教育学部教授

讓 西賢 先生

臨床心理学Ⅰ

1) 仮設構成概念

①人間のこころを理解すること

こころ	からだ
心理学…説明をするための学問	医学…発見していく学問
実体がない…性格、感情、知能、学力	実体がある…解剖、病理、治療、予防

②操作的定義 心理テストの効能とトリック

③数量化 例：知能…知能検査ではかる

2) 人間理解への基本的姿勢

法則定立的理解 (nomothetic understanding)	個性記述的理解 (idiographic understanding)
集団全体の特性（個人間法則）	個性重視（個人内法則）
<ブルンズウィック E.Brunswick>	
外側からの理解	内側からの理解
<村上英治>	
3人称心理学 (我－それ関係) ながめの接近	2人称心理学 (我－汝関係) かかわりの接近

「目の前のこの子をどう理解する？」

↓

どんな特徴があるか。

↓

どんな問題があるか。

↓

1)、2) を合わせて支援を考えていく。

3) 欲求の構造の理解

① 欲求階層説 マズローA.Maslow・・・人間の欲求は階層をなしている。

i) 欠乏欲求・・・外から充たされる、その都度必要、すぐ欠乏する

高 ↑ 低	承認欲求	「よくできました」「すごいね」
	所属愛情欲求	人間関係がうまくいっているなど
	安全欲求	セキュリティー
	生理的欲求	お腹が空いた、眠い、トイレに行く

低次元の欲求ほど
優先して充足

ii) 成長欲求・・・内から湧き上がってくる
・自己現実への欲求

至高体験 peak experience	高原体験 plateau experience
強く大きい感動 やったー！！ 	弱く長く持続する 日常、持続する幸福感 

i) が充たされた上に ii) がくる。

② 葛藤 (conflict) の意義

広義：同時に充たされることのない欲求が同時に2つ以上生起すること

i) 接近-接近葛藤 ++ 葛藤	欲しい物が2つあって1つを選ぶ →結果、欲しいもの1つは手に入る
ii) 回避-回避葛藤 -- 葛藤	嫌なことが2つ 例) 勉強も留年もいや 働くのも貧乏もいや
iii) 接近-回避葛藤 +- 葛藤	小さな幸せ、大きな不幸 大好きなことを我慢して×になることを防ぐ

一番軽い

適度な葛藤体験→自我機能 (こころのはたらき) を強くする。

臨床心理学Ⅱ

園における危機対応 ～熊本地震をわが事として～

5月23日から3名（譲先生含め）、熊本でカウンセリングにあたる。危険で突発的な出来事（この場合は大地震）による急性ストレス反応への対応は、すぐに態勢を整えてできれば1か月以内に解決できるといいのだが、今回は余震が多く熊本側からの要請が慎重になったため、この時期になってしまったが対応に向かう。

危険で突発的な出来事がおこる→急性ストレス反応（個人レベル）

- 行動面…早口になる、落ち着きのない動き、事故を起こす、喧嘩をするなど
- 身体上…眠れない、頭が痛い、食欲がない、めまいがする、身体がだるいなど
- 思考・認知面…何をやっているのかわからない、考えがまとまらないなど
- 気持ち…怒り、絶望感、不安、恐怖、うつ状態、自責感、不信感、無力感など



これらの症状や様子はいつもとは違うが、普通の反応（正常）である。
だから大丈夫！ということを伝えていく。

心理的反応の回復のプロセス

第1段階 ショック：あたまが真っ白

→第2段階 否認：「何かの間違いだ！」

→第3段階 怒り：「なぜこんなひどい目に！」

→第4段階 自分をもっとこうしておけば

→第5段階 悲しみ：失ったものは戻らない

→第6段階 適応と再起：徐々に元の生活へ

集団（組織レベル）の反応 ※学校を保育園に置き換えて考えるとよい

学校コミュニティの危機とは

児童・生徒や学校全体を巻き込む突発的で衝撃的な出来事が生じることによって、学校コミュニティ全体が機能不全に陥ること。↳児童の自殺、児童による殺傷事件、教師の突然の死など

緊急支援 …学校コミュニティが主体となって児童・生徒の心のケアを行う事に対する専門家の後方支援活動。

（目的）・学校コミュニティとしての本来の機能を取り戻すこと

- ・学校での事故、自殺などの後に起こるうわさや群発自殺などの二次被害に対する一次予防

(必要性) …子どもは危機的な出来事を経験すると身体面、心理面、行動面に渡りさまざまな反応（「異常な」事態に対する「正常な」反応）を起こす。



- ・適切な時期に適切な対応を行うことによって大半の健康な子どもの反応は収束可能。
- ・適切な対応がなされないと PTSD, うつ状態、種々の問題行動を起こし、生涯にわたる影響が残る。

専門的、継続的なケアを必要とする一部の子どもを早期に発見し、対処する必要がある



学校コミュニティの機能不全のため、不適切・不十分な事後対応がなされる危険性がある



早期（事件・事故後 24 時間から 72 時間！）に外部からの支援を受けて緊急支援プログラムを実施することが必要。

(3本の柱)

- ・危機的な出来事を体験した際のストレス反応とそれに対する対処法についての情報提供を行うこと。種々の反応が起こるのは、きわめて正常であることを伝える。
- ・事件・事故についてのできるだけ正確な情報を伝えること。（←当事者や保護者の了解）
- ・事件・事故についての各自の体験を表現する機会を作ること（グループ、個別、アンケート）

- 保育園で何か起きたときは、臨床心理士会に応援をお願いするといいい。
- 昔と今とでは家庭や地域のキャパシティが違う。家で子どもが話を聞いてもらえない。是非かの判断ではなく、気持ちを受けてもらうということが大切。
→どういった受け止め方がいいか…
「それは〇〇だよ」と自分の考えを伝えるのではなく「〇〇だよ。」とそのままの思いを受け止める。
→「この人にだったら、何を言ってもいいんだ」と身近な人に受けとめてもらえる環境が、予防カウンセリングとなる。